

1. はじめに

私はかつて社会部の記者として名古屋の歴史、特に江戸時代の歴史について取材する機会があり、その過程で、名古屋は朝鮮通信使と深いかかわりがあることを学びました。さらに名古屋開府400年（2010年）を前に、ユニークな尾張藩士・朝日文左衛門重章を紙面連載で取り上げることになり、彼の日記『鸚鵡籠中記（おうむろうちゅうき）』を読んで、朝鮮通信使について興味深い記述がされていることを知りました。

尾張藩あげて朝鮮通信使を歓待する様子や、通信使一行の立ち居振る舞いが生き生きと描かれ、辛基秀氏の『朝鮮通信使の旅日記』（PHP新書）など多くの著書で引用されているところです。

ただ、『鸚鵡籠中記』の中に登場する朝日家の朝鮮通信使見物については、簡単に言及されているだけのためか、これまであまり取り上げられてきませんでした。きょうは、朝鮮通信使が名古屋に到着する直前や当日の文左衛門の行動とともに、家族の様子を紹介させていただきます。

2. 朝日文左衛門と『鸚鵡籠中記』

朝日文左衛門（1674年～1718年）は尾張藩の御天守鍵奉行（ごてんしゅかぎぶぎょう）を務めた朝日定右衛門の三男に生まれています。朝日家の知行は100石で、尾張藩では中級に属し、武家屋敷が立ち並ぶ名古屋城下の主税町筋（現在の名古屋市東区主税町）にある敷地面積約400坪（約1300平方メートル）の屋敷に住んでいました。

尾張藩士は概ね藩主を警護する馬廻組と城を警護する城代組の二つのグループに分かれますが、朝日家は代々城代組に属し、文左衛門の最初の職務は「御本丸御番」、つまり天守閣や本丸御殿などのある本丸エリアのガードマンでした。

その後、文左衛門は役料40俵という特別サラリー付きの「御畳奉行（おたたみぶぎょう）」を拝命します。江戸時代に入り、武家の居住空間にも畳が入ってきたことを受けて設けられた比較的新しいポストで、藩主が出かける寺院や別荘などの畳替えを指揮する役割です。朝鮮通信使が名古屋入りする前にも、宿舎となる寺院の畳のチェックを命じられています。たいして忙しくはないうえ、畳の納入業者からは接待攻勢を受ける、いわばおいしいポストでした。

無類の酒好きで、父も母も遺言代わりに「大酒を飲むな」と戒めたほどです。

酒毒による黄疸症状も出て、45歳で亡くなりました。

これだけなら平凡な藩士にすぎず、歴史に名前を残すことはなかったでしょうが、18歳の元禄4年（1691年）6月13日から書き始めた『鸚鵡籠中記』という日記が、文左衛門を尾張藩の歴史上、欠くべからざる人物としました。この日記には、身辺雑記から市中の事件、自然災害、さらに藩政のことまで、病気で筆が持てなくなる享保2年（1717年）12月29日まで、27年にわたり毎日、こと細かく記録しています。

藩主やその生母の行状にまで言及し、辛辣な批判を浴びせていますから、生前、もしこの日記が公になっていたら、文左衛門も朝日家も厳罰に処されていたに違いないでしょう。

3. 第8回朝鮮通信使

文左衛門は幼いときに、名古屋を通過した第7回朝鮮通信使（1682年）を見ている可能性があります。日記の執筆期間中に訪れたのは、正徳元年（1711年）の第8回朝鮮通信使だけです。

朝鮮では肅宗の治世です。徳川家宣の將軍襲職を祝うために、正使に趙泰億を任命し、5月15日、約500人の使節団が漢城を出発し、釜山を出港しました。この時、徳川幕府側の歓迎責任者となったのが新井白石で、これまで約100万両かかっていた総経費を約60万両にまで圧縮させるなど財政面では大きな成果をあげています。しかし、御三家筆頭の尾張藩の接遇については、白石の改革でも「従来通りでよし」とされており、名古屋での歓迎ぶりは第7回までと大差なかったと思われま

す。通信使一行の名古屋到着は10月5日。副使の任守幹の紀行録『東槎日記』（若松實訳）によると、この日は雨で、大垣を夜明けに出発し、木曾川を船橋で渡って起宿で昼食をとっています。名古屋到着は夜がふけてからとなり、午前零時が回ってから宴席が設けられています。

尾張藩領に入ってから、通信使の行列を見ようという人出は、当時、江戸に次ぐ大都市の大坂以上で、「見物人たちが街頭と路地を埋め、甚だしきに至っては野の中に家を造って見る者も多かった」と記されているほどです。

4. 朝日家と朝鮮通信使

文左衛門の『鸚鵡籠中記』では、正徳元年5月から、朝鮮通信使関係の記述が頻繁に登場し、12日に項目には、「水野で去年より飼育していた鹿5頭は深井（名古屋城御深井丸）へ渡す。1頭は途中で死亡」とあります。通信使一行

の料理に出すために移したのでしょう。水野とは春日井郡上水野村（現在の瀬戸市）にあった御林方役所のことです。

6月26日には近郊のえびつる山（現在の名古屋市天白区）で、勢子2500人を動員して鹿狩りを実施、棚落としという方法で、16頭を生きたまま捕獲したことも紹介しています。通信使一行に肉料理を提供するためです。

9月23日には、本人も「御豊御用にて役所に出仕するように」との命令を受けました。このような状況から、朝日家では早くから通信使一行の来日や名古屋到着の日程などを知る立場にあり、かつ楽しみにしていたことが想像されます。

朝日家と通信使とのかかわりを増やすもう一つの要素がありました。文左衛門は2年前の宝永6年（1709年）12月に、娘のこんを御林奉行・水野勘太夫正照の次男で跡取りの久治郎正秀に嫁がせています。先ほど紹介した鹿狩りには御林奉行も深く関与しており、こんもまた、舅や夫を通じて、通信使一行への興味を持ったことでしょう。

なお、日記ではふれられていませんが、私は「こんは久治郎の後妻に入った」と考えています。久治郎とこんは14歳もの年齢差があったこと、先妻の子と思われる幼い嘉吉（加吉とも表記されます）が、日記に何の説明もなく登場するからです。

こんは享保2年（1717年）6月に第一子の亀之助（後の権平正興）を産んでいますが、後に久治郎の跡目をまず継ぐのは、総領の代助正朝です。嘉吉は代助の幼名と考えるほかありません。

話を戻します。通信使一行の名古屋到着予定日の2日前、10月3日の日記に「おこんが韓人見物のため里帰り。加吉同道」とあります。嘉吉を朝日家に連れてくるのは、この時が初めてです。

通信使を心待ちしていたのは名古屋城下の武士やその家族、町人だけではありませんでした。近在の村々からも見物に押し寄せたことでしょう。翌4日の城下の様子について日記は「本町通やそのほかの通りでは、商家は戸障子を外して室内にきらびやかな屏風を立て、巷は一日中、見物の男女であふれていた。まるで御祭礼のようだ」と、沸き立つような様子を描写しています。

本番の5日、日記は通信使一行の到着、投宿、宴会などの記述であふれかえり、家族については、「(文左衛門の)母やこんは、文四夫婦、瀬兵夫婦、桂心、加平次、勘太、久次らと、朝の8時ごろには幅下での見物に出かけ、午前零時ごろ帰宅した」とわずかに記されているだけです。

勘太、久次とあるのは、こんの舅の勘太夫と夫の久治郎のことです。警護や

警戒に駆り出された城下の藩士たちと違って御林奉行たちには差し迫った用もなく、嫁の実家とこのような時間を過ごせたようです。両家の親密度も伝わってきます。

また、こんたちが出かけた幅下は名古屋城の西になり、通信使一行が進んでくる美濃路が名古屋城下に入る入り口にあたる場所で、ここで待ち受けて見物することにしたのでしょう。懇意にしている商家でもあったのかもしれませんが。

帰宅が午前零時ごろとなったのはいかにも遅いように思われるかもしれませんが、文左衛門の記述によれば、行列の先頭は昼過ぎに宿舎となる城下の寺院に到着しているのに、正使など三使が宿舎の性高院に到着したのは夜の11時近く。行列はかなり長く伸びていたようで、最後まで見ていれば、帰宅が午前零時になっても不思議はありません。

一方、文左衛門は工作中で、性高院に警戒で待機していました。三使が到着した際の礼砲や、奏でられる楽曲を間近で見たり聞いたりしています。日本人の求めに応じて、明け方まで、写字官が書をしたため、画員が絵を描いており、その根気に感心しています。徹夜待機の文左衛門も、ぬかりなく書と絵を入手しており、帰宅後は家族に自慢したことでしょう。こんは3日後の8日に上水野村へ帰っていきました。

江戸からの帰り、通信使の一行は11月29日に名古屋に宿泊していますが、この時は朝日家の家族についての記載はなく、文左衛門が寺院周辺で警戒していただけです。

5. おわりに

家族、親せき挙げての朝鮮通信使見学という朝日家の行動は、当時の日本人が、異国人による華やかでにぎやかな行列に、きわめて高い関心をもっていたことを示しています。同時に、朝日家の長女こんの嫁ぎ先での複雑な家族関係まで浮上してきました。

実はこんも複雑な家庭環境で育ちました。母けいと文左衛門は、こんが10歳の時に離婚しました。文左衛門は1年もおかずに後添えのすめを家に入れています。こんは実母と生き別れ、継母と暮らすことになったのです。

同時に文左衛門の日記は、母とすめ、こんの女性3人がとても仲が良く、よく一緒に外出していることも記しています。このような朝日家での体験を踏まえて、こんには水野家の若妻として、嘉吉との親子関係を構築し、家庭の平和を守る知恵もあったことでしょう。今回の通信使見物を、水野家の家庭の安寧を創出する好機としたのではないのでしょうか。

文左衛門の日記からは、そんなことまで教えられるのです。

■朝鮮通信使と朝日文左衛門

1392	明德 3	李成桂、朝鮮建国 南北朝統一	
1401	応永 8	足利義満が朝鮮に使者を派遣	
1419	応永 26	朝鮮が倭寇の拠点である対馬を攻撃（応永の外寇）	
1428	正長 1	第1回通信使、将軍義教対面	
1439	永享 11	第2回通信使	
1443	嘉吉 3	第3回通信使、将軍義勝を祝う	
1589	天正 17	豊臣秀吉、対馬の宋氏を通じて朝鮮に入貢を求める	
1590	天正 18	秀吉の天下制圧の祝賀で通信使来日する	
1592	文禄 1	文禄の役（壬辰倭乱 イムジンウエラン）	
1596	慶長 1	通信使来日するも、秀吉、面会を拒否	
1597	慶長 2	慶長の役（丁酉倭乱 チョンユウエラン）	
1598	慶長 3	秀吉没	
1605	慶長 10	徳川家康、探賊使の松雲大師と会見	
1607	慶長 12	第1回通信使（回答兼刷還使）	秀忠
1617	元和 3	第2回通信使（回答兼刷還使）	秀忠 京都どまり
1624	寛永 1	第3回通信使（回答兼刷還使）	家光
1636	寛永 13	第4回通信使	家光
1643	寛永 20	第5回通信使	家光
1655	明暦 1	第6回通信使	家綱
1674	延宝 2	文左衛門、朝日家の3男で生まれる	
1682	天和 2	第7回通信使	綱吉
1700	元禄 13	文左衛門、御畳奉行に昇進	
1709	宝永 6	娘のこん、御林奉行・水野家の長男と結婚	
1711	正徳 1	5月12日 水野で飼育していた鹿5頭を御深井丸に移す 6月26日 えびつる山で2500人動員、大規模な鹿狩り。16頭生け捕り 8月25日 対馬藩の先遣隊が宿舎を視察 9月16日 第8回通信使、船で大坂に到着 家宣 10月3日 おこんが里帰り。加吉も一緒に 10月5日 母やおこんたちが朝、通信使見物に家を出る 昼以降、通信使の一行が順次城下の宿舎に到着 10月6日 通信使一行、出発。藩主も城下の商家で見物 10月8日 おこん、水野へ帰る 11月1日 江戸城で国書伝達 11月19日 通信使、江戸を出発、将軍も馬場まで出て見送る 11月29日 名古屋到着。文左衛門、暁に絵を4枚もらう 12月16日 通信使、船で大坂を出発	
1718	享保 3	文左衛門、死去	
1719	享保 4	第9回通信使	吉宗
1748	寛延 1	第10回通信使	家重
1764	明和 1	第11回通信使	家治
1811	文化 8	第12回通信使	家斉 対馬どまり